

3-17. 一般社団法人庄原市観光協会（広島県庄原市）

(1) 地域の概要

1) 庄原市の概要

【人口】

38,501人（H26.8.末）

【地勢】

標高 150m~200m の盆地をはじめ、全般に緩やかな起伏状の大地を形成しているが、北部の県境周辺部は 1,000m 級の山々に囲まれ、急峻で狭い地形となっている。また、市域の大部分は林野及び農地となっており、宅地などの利用は、おおむね河川に沿った盆地や流域に帯状に広がる平坦地に限定されている。本市を流れる主要河川は、西城川・比和川・神之瀬川・田総川などの「江の川水系」と、成羽川（東城川）・帝釈川など、「高梁川水系」の河川である。東西約 53km、南北約 42km のおおむね四角形である。

【面積】

1,246.60h m²（広島県の約 14%、全国自治体の中で 11 番目、関西以西では最大の広さ。但し山林が 84.2%）

【気候、自然】

三次盆地の北端に位置し盆地特有の気候で夏熱く、冬寒い。標高が 150m~1299m 有、全般として積雪量多い。（スキー場 4 有）

標高が高く雑菌が繁殖しにくいいため巨木、が多く成育している。

【歴史】

神話時代の古事記に関する口伝、伝承物多数有。弥生時代の四隅突出型弥生墳丘墓は出雲文化圏として特筆すべきものである。出雲と吉備の中間点
奈良時代は税金として鉄製品を朝廷に納めていた記述あり。

平安時代以降は地頭 山内首藤家の支配を中心に江戸時代までつづく。

福島正則そして浅野藩の支配で幕末までつづく。（城関係、有名寺院無）

【観光】

自然を利用したものが多く帝釈峡をはじめ東城町と高野町のリンゴ園、吾妻山ロッジと休暇村帝釈峡、ひろしま県民の森、かさべるで、神龍湖畔の錦彩館などの宿泊施設。お祭りとしては「早駆け馬神事」「東城おとおり」「大山牛供養田植」「比和牛供養田植」などが有名。

温泉が 9 カ所有。スキー場は 4 カ所有。軽登山の出来る 1200m 級の比婆山連山有。国、県、市の指定天然記念物多数有。古事記伝承の地。

(2) アドバイザー派遣申請の背景

1) 派遣申請の背景

庄原市は 2013 年度、庄原市観光振興計画

(<http://www.city.shobara.hiroshima.jp/sightseeing/sightseeing/post-107.html>)

を策定し、そのコンセプトを「さとやま遊びで感動を生む観光地域づくり」設定しています。市内には比婆道後帝釈国定公園などの素材があるが、活かしきれていないのが現状です。計画を推進するにあたり、当観光協会としてエコツーリズム推進は不可欠と考えています。

現在、ボランティアガイド組織はあるが、高齢化および後継者不足により人材育成が必要になっています。また、庄原市内の横の連携が、乏しく来訪者および旅行会社のワンストップ窓口機能が必要と感じています。

当観光協会としては、各種体験プログラム（農業体験など）を実施しているが、広報展開で課題があり、人気プログラムと不催行プログラムの差があります。不催行プログラムを新たなエッセンスを加えコーディネートできればと考えており、広報展開のアドバイスも頂ければと申請をしました。

(3) アドバイザー派遣の概要

日	時	平成 27 年 1 月 21 日（水）～23 日（金）				
場	所	広島県庄原市				
ア	ド	バ	イ	ザ	ー	株式会社ツーリズムワールド代表取締役 高梨 洋一郎 氏
参	加	者	合計 38 名			
スケジュール・方法		【1 日目】 ・視察：国営備北丘陵公園、オープンガーデン 【2 日目】 ・視察：口和郷土資料館、比和科学博物館、大鬼谷キャンプ場、乳下がりイチョウ、熊野の大トチ、熊野神社の広島県下第一の杉、スキー場、比婆山登山の状況説明、おとおり、散歩ギャラリー、砂鉄生産、リンゴ、3 本桜説明。帝釈峡白雲堂、雄橋 神龍湖 帝釈峡山荘、コナラ、日本ピラミッド説明 【3 日目】 ・講演「エコツーリズムの考え方と手法」 ・講演「庄原の観光の現状と課題」				

(4) アドバイスの内容

1) 視察、助言等

①国営備北丘陵公園

鉄工房、竹工房、花畑、さとやま屋敷、等を視察していただき、体験型、滞在型の観光地づくりの重要性と、一つでも多くの体験を作ると良いというアドバイスいただきました。そして「庄原の地に国営のこのような素晴らしい公園があることを知らなかった」「日本中に宣伝すれば大きな観光資源となる」と宣伝の重要性をアドバイスいただきました。

②オープンガーデン（貝崎庭 三村庭）

参加の庭が一般家庭の庭で、日本庭園、イギリス風、フランス風、ドイツ風メルヘンチックなど 30 庭あると説明したところ、ガイドの必要性についてアドバイスを受けました。

「ガイドが説明すると感動が 3 倍になる、」「そしてガイドは一方向的に説明するだけでなくインタープリターと呼ばれる物の背景まで語れるようでないといけない。」

エコツーリズムと合致する物としては最高のものが庄原にはあるということでした。

③口和郷土資料館

日本で初めてのCDプレーヤーや世界で数店しか実在しないテレビ、ステレオ、ラジオ等の弱電気が全て可動し、お客さんに実働状態をお見せできるという凄さに感銘をいただき、阿部館長の「まだまだ地域住民の参加が少ない」という言葉に対し、高梨先生は地域住民の参加をうながす施策を市をあげて 検討する必要性についてアドバイス下さいました。

④熊野神社と古事記伝説、そしてブナ林

日本最古の物語 古事記伝説・県史跡比婆山伝説地・国の天然記念物ブナの純林・広島県で一番大きい熊野の大杉等を視察いただき、地元ガイドの高齢化を見て先生はガイド育成とガイド制度作りについて「優れたガイドコンサルタント、教育セミナー」等利用した方が良いとアドバイスをくださいました。

⑤帝釈峡

東城町の帝釈峡では世界 3 大天然橋の一つ「雄橋」新しい観光目玉「水陸両用車」等を視察していただきました。トイレが無いことは致命的。外国人観光客にうけそう。

2) 講義

①高梨先生自己紹介

②エコツーリズムとの出会いとエコツーリズムとは

エコツーリズムの概念, 自然Nature・持続Sustainable・生態系Ecologicallyについて

ダーウインの島を救ったエコツーリズム「ガラパゴスの例」ガラパゴスの鳥はにげない。

ライオン 1 頭の値段紹介、死んだライオンは 1325 ドル動物園のらいおんは 8500 ドル自然で見るライオンは 515000 ドルの経済効果がある。

環境専門家の出会いとエコツーリズム推進協議会の設立の概要。

③何故いまエコツーリズムなのか？

マストツーリズム型観光の限界について

持続型社会の到来（環境と観光の共存）について

④庄原観光の現状と課題について

庄原市観光計画は素晴らしい良くできている。

オープンガーデン、国営備北丘陵公園、比婆山、帝釈峡、等のガイド組織の充実と後継者育成施策について。

交流型、滞在型観光地作りの必要性について。

庄原観光実施計画への期待（PONAからの脱却）

従来型観光（周遊型団体旅行）から交流体験型観光へ

⑤質疑応答

男性「庄原市がどこにあるかご存じでしたか」

先生「知らなかったこれから好きになります」

男性「外国人が来る観光地は次々とやって来ると聞きましたが何故でしょう」

先生「おもてなしの好印象が口コミにつながっているからではないでしょうか」

(4) アドバイザー派遣実施の効果

1) 参加者や関係者に与えた効果

①エコツーリズム、又は、地域資源について理解が得られた

ライオンの値段の話から庄原市の観光は自然だけが売り物で他はあまり売り物がないと思っていたが、自然こそが大きな付加価値を生み出すお宝だと気付かされエコツーリズムを浸透させなければいけないという機運がわいた。

②今まで課題としていたことがより明確になった

子供に対する自然教育の重要性：子供に自然体験させると情緒が安定し人の痛みが良く分かる人間になるとのアドバイスにより、自然豊かな庄原市としてはできるだけ多くの自然体験を組み込みエコツーリズムを実践すれば人の心も豊かにし

合わせて実益もあることがわかった。

③今までの課題に対して取組方が分かった

ガイドの後継者問題：今までは一つの観光資源の近くの人だけがエキスパート的に説明ガイドをしていたが、そうではなく多方面からガイドを募り、窓口を観光協会を取り仕切り、養成講座なども開催したほうが良いとのアドバイスをうけ早速庄原市観光協会に窓口を設置した。

④今までとは別の課題が明らかになった

庄原市をご存じない人がまだまだ日本にも世界にも多いことを知った

2) 今後期待される効果

- ・積極的エコツーリズムの実践による観光発展。
- ・ガイドだけでなくインタープリターと呼ばれるエキスパートの育成後の活躍

3) 今後の取組

- ・インタープリターの育成
- ・今回の派遣では、エコツーリズムとは何かについて、概要をアドバイスしていただいた。今後は、実際の取組の中で、効果的な宣伝、魅力的なプログラム作りやガイド組織について考えていきたい。

(6) 今後の取組推進にあたり参考となった事項、その他感想

1) 参考となった事項

高梨先生のお話から、

- ・ガイドとインタープリターの違い
- ・子供に対する自然教育の重要性

2) その他感想

高梨先生のお人柄は万人に受け入れられエコツーリズムも理解しやすいとおもいました。

【記録写真】



国営備北丘陵公園 視察



口和資料館にて館長の説明を受ける
高梨先生



世界三大天然峡 帝釈峡



楽笑座にて講義

(7) エコツーリズム推進アドバイザーから地域へのアドバイス

株式会社ツーリズムワールド代表取締役 高梨 洋一郎 氏

1) 地域における取組の現状と課題

①現状の取組

庄原市は広島県北東部の山岳地域に位置する人口 4 万人弱の典型的な中山間都市である。農林業や製造業の長期的な衰退を背景に人口減に歯止めがかからないことから、2005 年周囲の 6 町を併合する形で新・庄原市として新たな地域づくりに取組始めている。観光面では、中国地方を代表する景勝の地のひとつである帝釈峡に加え、2012 年にグランド・オープンしたリゾート型公園（都市公園）国営備北丘陵公園やスキーリゾートでもある県民の森など豊かな自然環境と東西南北に延びる交通の要所という地の利に恵まれていることから、近年県内でも漸減傾向に歯止めがかかっている。しかしその大半は日帰りや短時間来訪客で宿泊客は伸びず、かつ新庄原市全域への波及効果は殆ど見られていない。このようなことから、庄原市は豊かな自然環境と古事記伝説をも有する歴史や伝統文化を活用した里山型観光の本格的な推進を図るため官民一体となつての庄原観光協会を設立すると共に、「さとやま遊びで感動を生む観光地域づくり」を基本コンセプトにした 5 カ年の「庄原観光振興計画」（平成 26 年度～30 年度）を策定、その第一歩を踏み出している。

②課題

しかし、近畿以西最大の広大な面積に点在する自然資源や文化・歴史資源を「さとやま型観光資源」として活用するためには、体験型・交流型を柱に全域の観光資源候補をあらためて問い直し、将来的な保全策も含めて整理し、その活かしたかを考え、マーケティングに結びつける仕組みづくりが不可欠である。その有効な手法として地域資源の宝探しからはじまるエコツーリズムは、庄原里山観光の主軸になると考えられる。すでに平成 30 年度を最終年とする「庄原観光振興計画」は、「さとやまの特色を生かした観光地域づくり」を目標に、①豊かな自然と歴史を生かした山遊びの充実②花と緑のまちづくりの推進③食材の宝庫を生かした観光地域づくり④ほんもの体験メニューの充実と教育旅行誘致⑤さとやま文化を生かした外国人旅行者の誘致を挙げ、その施策として「観光情報発信の強化と観光客の周遊促進」およびプロデュース機能の強化と関係者の連携や観光人材の育成などを柱とする「推進体制」策を掲げている。これらの諸方策はすべて里山型エコツーリズムの推進策に重なるところであり、振興計画に基づく「実施計画づくり」とその具体的な取組がそのまま、庄原観光の課題でもあると考えられる。帝釈峡や国営備北丘陵公園といった一部を除き目立った観光資源のない庄原市にとって豊かな自然資源を活かしたエコツーリズムへの取組は、庄原観光の新たな創出であり、「エコツーリズム推進法に基づく全体構想」まで進められれば、中国地

方を代表する「里山型観光」の代表となる可能性もある。

2) 特に魅力を感じた地域資源等

①国営備北丘陵公園

1995年の着工以来2012年のグランドオープンまで17年をかけて造営されてきた「丘陵公園」は中国地方唯一の国営公園であり、年間40万人の入場者を数えるリゾート公園。春から秋のフラワー観賞、冬場のイルミネーション観光、音楽祭などの一般観光のほか、郷土の文化を伝える体験プログラムなど交流型観光の拠点ともなっている。

②帝釈峡

18kmに及ぶ石灰岩の奇岩・帝釈峡は庄原の地質学的な興味をそそる。

③スキー場と温泉群

スキー場と温泉地は周囲の自然環境をフィールドにしたエコツアーの適地。

④古事記の里（熊野神社と巨木群）

古事記の里に林立する杉の老木群と国の指定天然記念物である大トチ、熊野の古事記伝説は、整備されれば庄原の自然・歴史・文化遺産の象徴となる。

⑤オープン・ガーデン

四季折々の草花を一般に開放して楽しませてくれるオープンガーデンは丘陵公園の花園と共に庄原里山観光の代表であると共に、交流型観光を推進する庄原ホスピタリティの象徴的な存在ともなっている。

⑥口和郷土博物館

口和地域の民具を収集して展示してる郷土資料館は、大手メーカーの技師として海外等で活躍した館長がUターンして明治時代まで遡る電気通信機器を再生して楽しませてくれる異色の資料館。メディアに多く取り上げられ、古い映画鑑賞を楽しみ交流するなど地域の人達を中心とする交流サロンともなっており、庄原の新たな魅力ともなっている。このほか、庄原にはブリキ缶型エコストーブで脚光を浴び始めた異色の名人がいるなど、里山の魅力を発信し続ける未発掘の達人群がいる。

⑦里山の佇まいと文化

山間の田畑を段々状に整地してその上に1軒一軒の民家が武家屋敷のようにどっしりと建つ田園風景は、かつての里山の豊かさを感じさせる庄原の象徴的な佇まいでもある。伝統的な生活見学や古民家に泊まる生活体験の場として活用できる可能性を感じさせる。

3) アドバイス（講義等）の概要

すでに「庄原ふるさと体験」の名称で里山体験型観光をスタートさせている庄原

の課題は、その動きを新・庄原市全体に広げ、新たな自然・文化資源の活用と保全に結びつけて行くことが基本的な課題になる。その観点から、「庄原エコツーリズムが目指すもの——交流・滞在型観光地づくりへの挑戦」のタイトルで、①エコツーリズムの基本的な概念と仕組み②宝探しやフェノロジーによるエコツーリズムの資源発掘と整理③庄原エコツーリズムの手法、を内容とするプレゼンテーションを実施した。関係者が一堂に会してエコツーリズムを勉強するのは初めての機会であることから、環境保全型の里山観光が庄原の目指すべき新たな観光地づくりに繋がる認識の共有とコンセンサスづくりが最初のステップになると判断、地域の身近な自然・文化資源の見直しを官民一体となって始めること（勉強会や研究会の開催など）をまず提案した。その上に立って中国地域における里山エコツーリズムづくりを目指し、将来の「エコツーリズム推進全体構想」へ繋げることを期待して、参加者との意見交換を行い、認識の深堀を行った。庄原市は広大な面積を有し山岳地域から田園地帯まで自然は豊かで多様である。また出雲神話の一面を形成する地域だけに歴史も古くまだ十分に検証されていない歴史文化資源も多い。そのため豊富な自然・文化資源を整理して、それを新たな観光資源として活用、マーケティングに結びつけてゆくには、「住んでよし訪れてよし」の観光業界のみにとどまらない地域ぐるみの戦略的な取組とその基本的な理念の共有が必要になると思われる。市民グループの代表者からは、かつて旧庄原市時代に観光資源探しを行い、その一端を実現して今日に至っているが、アイディアの多くは継続的な取組がなく頓挫した報告と、今回はその教訓を生かし持続可能な取組に繋げて行きたいとの意見が出されると共に、市会議員の代表者からはその具体化の必要性が提案された。

宝探しや里山型エコツーリズムの参考事例として主に次の3例を取り上げた。

- ・埼玉県飯能市のエコツーリズム (<http://hanno-eco.com/>)
- ・岩手県二戸市 (<http://www.city.ninohe.lg.jp/forms/top/top.aspx>)
- ・岩手県二戸市観光協会 (<http://ninohe-kanko.com/>)
- ・鳥羽エコツーリズム (<http://www.city.toba.mie.jp/kanko/eco/>)

4) エコツーリズム推進全体構想への取組状況・意向について

①全体構想への取組状況について

エコツーリズムの視点から新たな観光地づくりを目指すという初期の段階にあると考えられ、全体構想作成の必要性については、まだ全く未検討の段階である。

②全体構想への意向について

観光資源としてさらに活用できる自然・文化資源の発掘や発信とマーケティングの展開及びそのためのエコツーリズムを担う人材の育成（インタープリターやコーディネーター）が先決であるとの段階にあり、エコツーリズム推進法の精神を見つめた全体構想作成への意向はまだ未定。

③全体構想認定に向けて、今後必要なこと

まずはエコツーリズムを推進するコアづくりをスタートさせることが大前提。観光業者以外の諸団体や関係者も含めたステークホルダーを含め中核となるのは一般社団法人の庄原市観光協会になると思われるが、庄原市長の主導のもとに「推進組織」をまず立上げ、エコツーリズムによる庄原里山観光推進のための具体的な取組を開始する必要がある。「庄原市観光振興計画」の実現を図り、その観光資源となる自然文化資源の保護・保全策が併せて検討されれば、その延長線上に全体構想設定の必要性とメリットが自ずと見えてくることになると考えられる。

5) 地域に対する印象、今後地域に期待すること（メッセージ）

庄原市はすでに里山型観光の推進を柱とする「庄原市観光振興計画」を策定、商工課が実施部隊である一般社団法人庄原市観光協会と一体となって、その具体的な推進に乗り出している。今回、「エコツーリズム・アドバイザー派遣事業」に手を挙げたのも、その実施にあたっての初動プロジェクトである。

原爆関連観光で圧倒的な吸引力をもつ広島市や世界遺産の厳島神社をもつ廿日市市宮島、そして福山市や尾道市といった全国的にも有名な諸都市に比べ、庄原市の知名度は西日本はもとより中国地方でも残念ながら恐ろしく低い。中国横断道路や瀬戸内海と日本海側を繋ぐ交通の要所にありながら、庄原市は広島、岡山、島根の県境に位置する北東広島の山間部に位置する地味な地方都市で、観光では全国レベルの観光スポットである帝釈峡のほか、中国地方の公園リゾートとして近年人気を集め始めた国営備北丘陵公園地以外目立ったポイントがない、自然だけが豊かな中間山地のひとつだ、という印象が一般的である。

神奈川県半分という広大な面積と人口僅か4万人弱という庄原市の主な観光スポットを回って感じることは、山岳地帯から田園地域に至る多様で豊かな自然と、逆に言えば観光スポット間の距離が離れすぎていてなかなか効率的な周遊型観光は組みにくいという印象だった。その分、フラワーガーデンめぐりや巨樹巨木観察、古民家や伝説の里探訪などのテーマを設定しての観光であれば、ゆったりと交流や体験を楽しみながら庄原の自然の恵みと人情に触れるいわば里山観光の宝庫になる可能性が高いという印象をもった。

市民有志によるオープンガーデンや郷土資料館の活用などその萌芽は既に見えているが、さらには石油缶を活用したエコストープで全国的な注目を集め始めているバイオマス活用の先進地としての新たな里山観光の可能性も大きい。

そういった動きを補完するためにも、庄原の自然文化資源をマーケティングの観点から焦点を絞って深堀し、中国地域における「里山観光」のモデルとしてのブランド・イメージを創り出すことが、庄原観光の目指す道であるとの印象を深くした。